発　表　要　旨

第１日目

６月２１日（土）

１．フォーラム、課題別研究プロジェクト

　　１２：１０～１４：２０

２．自由研究発表

　　１４：４０～１７：３０

フォーラム①　M-12 (M 号館１F）(12:10-13:10)

問題別討論会：「授業での教師と児童生徒との英語でのやり取りを豊かにするには？」

提案者: 吉崎 理香 （富山国際大学）兼コーディネータ
長澤 史 （昭和町立西条小学校）
田中 知聡 （山梨県立甲府昭和高校）

本問題別検討会では、小・中・高それぞれの授業現場において、教師と児童生徒の英語による「やり取り」をいかに深め、広げていくかを共通のテーマとして議論する。３名の発表者は、やり取りが続かない、発話が引き出せないといった実践上の課題に対し、教師の姿勢や中間的な働きかけ、発問の工夫、児童生徒の関心を引き出す教材設定など、それぞれの立場から具体的な方策を提案する。こうした実践を共有しながら、やり取りの指導における教師の役割をあらためて問い直すことが本会のねらいである。発表後は、参加者との自由な意見交換を通じて、やり取り指導の悩みや工夫を共有し合い、明日からの授業に生かせる実践知をともに考える対話の場としたい。

長澤　史 （昭和町立西条小学校）
小学校外国語の授業における児童が英語を使ったやり取りを深める方法

本提案では、指導者や ALT と児童の積極的なやり取りを促すためには、どのように取り組めばよいのか、小学校 6 年生の「話すこと「やり取り」」の実践例を取り上げる。小学校の授業で行われる Small talk では、指導者と ALT がモデルとしてやり取りを行ったり、指導者が児童に尋ねたり、児童同士のやり取りが行われる。指導者、ALT と児童三者や児童から指導者や ALT に尋ねるようなやり取りは行われることはあまりない。提案授業では、New Horizon Elementary English Course 6 の Unit7　“My Best Memory”を扱った。第 6 次の授業で ALT が自身の小学校の一番の思い出について授業者とやり取りをしながら説明を行った。ALT が自身の小学校の思い出のスペースキャンプで宇宙食について話をしていた時、一人の児童が自発的に“How was it?”と ALT に質問をする場面が見られた。このことから、児童が英語を使ったやり取りを楽しむためには、授業の中でやり取りを継続的に行い、既習表現を繰り返し使うことによって自信をもって質問したり答えたりできるようになるのではないか、また、児童が興味や関心のある話題を設定し、聞きたくなる、伝えたくなるような状況をつくることが必要ではないかと考える。

吉崎理香（富山国際大学）
英語のやり取り指導における教師の役割再考：姿勢・関与・指導の視点から

「生徒が積極的に話そうとしない」「やり取りが一問一答で終わってしまう」「授業中に時間が確保できない」「評価の仕方が難しい」。やり取りの指導が大切だとわかっていても、こうした悩みを抱える教師が少なくありません。やり取り指導における教師の役割を捉え直してみることがこれらの悩みを解決するヒントとなります。まず大切なのは、教師自身が英語でのやり取りを楽しみ、「生徒ともっと話したい」「生徒のことを知りたい」と思う姿勢です。そのうえで、やり取りを活性化させるためには、教師によるちょっとした声かけや言い換え、話題の広げ方といった工夫が効果的です。本発表では、やり取りのストラテジーや Turn taking など、やり取りを支える基本的な要素に触れながら、授業中の中間指導や、ファシリテーターとしての教師の関わり方に注目します。やり取りの力（Interactional Competence）を育てるために、どのような指導が有効か、授業で再現しやすい具体例を交えて提案します。やり取りが楽しく広がる授業づくりの一助となれば幸いです。

田中 知聡 （山梨県立甲府昭和高校）
教師と生徒の自然な英語によるやり取りを育む授業の工夫 ― 高校英語授業における教師の発問と生徒との関わりを中心に ―

本発表では、高校英語授業において教師が発問を活用しながら生徒とのやり取りをして授業を展開していく方法について報告する。私は現在、県立高校の２年生を担当している。授業では、教科書を使って生徒がより自然な場面・状況で聞いたり読んだりする活動や、話したり書いたりする活動に取り組めるように工夫している。私自身の授業を振り返り、教師と生徒の自然なやり取りを活用できる場面と発問について紹介したい。高校の授業では、教師が生徒に英語で問いかけても生徒からの反応がない、生徒に発話を促しても英語で話すことが難しい、という場面がよくみられる。そのような課題を踏まえて、教師と生徒が自然にやり取りをし、そのやり取りを授業の展開に生かすために行っている工夫について報告したい。私は、高校の授業には、これまで小学校、中学校で身につけてきた力をさらに伸ばして将来につなげていくという役割があると考える。英語授業のあり方や、生徒とのやり取りを通して身につけさせたい力、現状、課題とその解決策などについて意見を交換できればと思う。

フォーラム②　M-11 (M 号館１F）（12:10-13:10）SNSx

Talk Show “Ask Jarrell: Tips for Keeping Students Informed in Friendly English”

司会者：前田 昌寛 （金沢星稜大学）
発表者：Douglas S. Jarrell （元名古屋女子大学教授）

In this talk show, I will discuss mobile learning and a daily email magazine called Jaremaga that I have been sending out for 20 years.

I will start out with a personal introduction and talk about the reasons why I started the email magazine. I started sending out the email magazine in 2005 to provide learners with short, easy-to-read topical stories to encourage regular reading. The Internet was still relatively new, but as the years went by, the availability of online dictionaries allowed me to include more difficult vocabulary. However, I have continued to keep the stories short and the grammar as simple as possible. Since 2024, Jaremaga is no longer just an email magazine. There is now a YouTube video that accompanies each story.

Jaremaga began as a one-way email magazine, but it has become more interactive. Readers began to send in their own stories, and in 2011, I started Readers’ Corner to showcase their stories every Friday. I wanted to encourage junior high and high school students to write, so I started the Jaremaga Essay Contest in 2019.

I will conclude the talk show by demonstrating how Jaremaga can be used in the classroom to improve a variety of language skills including reading, listening, intonation and pronunciation, and writing.

課題別研究プロジェクト①　@Y-15 (Y 号館 1F)（12:10-13:10）

「タブレット PC を使用した「主体的・対話的で深い学び」の視点からの小・中学校の英語教育方法論」学校教育における英語指導の変化—デジタルツールと紙媒体の最適な共存
（最終年度発表）

代表: 高橋 美由紀 （愛知教育大学名誉教授）
共同：市川 裕理 （豊田工業高等専門学校）
西尾 由里 （名城大学）
清水 万里子 （岡崎女子大学）
森 直樹 （星槎大学）
米村 大輔 （鹿児島県立短期大学）

近年、小学校外国語教育において ICT の活用が進んでおり、特にタブレット端末の導入が学習環境に大きな影響を与えている。しかし、ICT の過度な使用が学習の質を低下させる可能性も指摘されており、教師主導型の授業との適切なバランスが求められている。本研究では、ICT と教師主導型指導を組み合わせた効果的な学習環境の構築について、事例研究を基に考察する。

まず、言語習得の初期段階では、教師が文法や発音の基礎を指導し、タブレット端末を補助的に活用することで、児童の理解を深める学習環境を構築できる。次に、児童の発達段階に応じたデジタル教材の導入を検討し、低学年では視覚的な教材を用いて学習を促進し、高学年ではより発展的な言語運用能力を育成する教材を活用することが効果的である。さらに、児童の学習意欲を維持するために、ゲーム要素を含む教材や学習管理ツールを活用し、自己調整学習を促すことも重要である。

本発表では、ICT と教師主導型指導を統合したハイブリッド型の教育モデルを提案し、児童がより効果的に外国語を習得できる環境を構築するための具体的な指導方法を示す。小学校外国語教育の質を向上させるための ICT 活用の最適な在り方について議論し、今後の教育改革に向けた方向性を示す。

市川 裕理 （豊田工業高等専門学校）
英語劇活動における ICT を活用した「協働的な学び」

文部科学省は、ICT を活用した「協働的な学び」の推進を重視しており、児童生徒が互いに意見を交換し、課題を共に解決する力を育むことを目指している。2025 年度からの整備方針では、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の両立を目指し、ICT 環境の充実が不可欠となっている。ICT を使った意見交換としては Web 上で利用できるオンライン掲示板アプリを活用したものがあるが、これは主に個人で考えた「結果」を共有し合うものである。本発表ではペア、あるいはグループ活動における ICT を活用した意見交換の「プロセス」に焦点を当て、英語劇活動における共同編集による原稿作成や、海外の学生と協働で原稿を作成し動画で表現した事例を紹介する。ICT の利点としては、一斉作業の効率化、音声や画像を含む多様な情報共有、記録の保存などが挙げられる。一方で、直接のやりとりによって学習者同士で発生する協働的足場かけは言語理解を深め、最終プロダクトの質を高める効果がある。協働的な学びを充実させるには、ICT の特性を理解し、活動の目的に応じて使い分けることが重要である。

西尾 由里 （名城大学）
小学校のデジタル教科書、ロイロノートを使っての英語発音の変化

小学校外国語活動での目的は英語を使ってのコミュニケーション能力を挙げることにあり、アウトプットを中心とした活動が多い。新学習指導要領（2017）では、発音に関して、「現代の標準的な発音」、「語と語の連結による音の変化」、「語や句、文における基本的な強勢」、「文における基本的なイントネーション」、「文における基本的な区切りを学習すること」が明確に記されている。また、現在、小学生一人に 1 台のタブレット端末を使うことができ、デジタル教科書などで英語音声、動画などから英語音声に関しても、豊富なインプットが可能となり、自分のペースで自分の目標に合わせ、好きなところを学習できる、すなわち個別最適化が可能である環境が整ってきている。そこで、課題の提示、提出が用意にできるロイロノートを使っての発音学習の様子を紹介する。小学 5 年生が授業内および家庭で、チャンツおよびシャドーイングの練習を通して、2 回の音声を収録し、どのような発音に違いがあるかを説明する。チャンツでは、ストレス、およびイントネーションが実現しているが、音素での獲得が難しかったが、シャドーイングおよびリピーティングでは、音素での変化も見られた。

清水 万里子 （岡崎女子大学）
学校教育における英語指導の変化—デジタルツールと紙媒体の最適な共存

グローバル化と生成 AI の発展に伴い、外国語教育は急速に変化している。本研究では、タブレット端末と紙媒体の特性を活かした英語教育の未来を探究し、デジタル技術の進化が学習環境に及ぼす影響を詳細に分析する。特に、英語習得の効率向上に寄与する要素を検討するとともに、紙媒体との補完関係を明らかにし、両者を適切に組み合わせる指導法を構築することを目指す。デジタル技術の活用により学習のインタラクティブ性や個別最適化が進む一方、紙媒体の強みを活かした深い理解と記憶定着の重要性を考察する。

さらに、小・中・高等学校における実践や調査研究の成果を基に、柔軟性と適応力を備えた教育アプローチの必要性を論じ、デジタルとアナログの融合による効果的な英語指導の在り方を提案する。

森 直樹 （星槎大学）
タブレット端末を活用した中学校英語の「話すこと（発表）」における思考力・判断力・表現力の育成

中学校英語の「話すこと（発表）」における「思考力・判断力・表現力」の育成のための効果的なタブレット端末の活用の在り方、指導と評価の在り方について考察し、明らかにする。指導場面において、紙の教材ではなくタブレット端末を活用した方が学びの質の向上につながるか、タブレット端末を活用せずに紙の教材を用いた方が学びの質の向上につながるかを見極めるためには、それぞれの領域における資質・能力を育成するための指導と評価の在り方が問われるだろう。本研究では、中学 2 年生の「話すこと（発表）」の育成を目標とした単元の中の一授業を事例として、「思考力・判断力・表現力」の育成のために、どのように紙媒体の教材とタブレット端末の教材を使い分けるべきかについて考察する。考察から、紙媒体の教材とタブレット端末の教材をどのように使い分けることが協働的な学びを生み出し、生徒の「話すこと（発表）」における思考力・判断力・表現力の育成につながるかを明らかにする。また、本事例における評価の在り方として、紙媒体の教材とタブレット端末の教材を適切に使い分けた指導のもと、内容面の指導を充実させることができる評価基準を提示する。

米村 大輔 （鹿児島県立短期大学）
協働的な学びの実現について―中学校・高等学校の実践報告

文部科学省による GIGA スクール構想推進に伴い、近年では中等・高等教育機関での英語の授業で ICT が盛んに導入されており、音声指導やライティング指導などに ICT を駆使した様々な工夫がなされている(Higuchi, Sasaki, & Nakamuro, 2017)。中でもタブレット PC は協働的で対話的な学習を促すとして近年最も使用されているデバイスの一つであるといえる。しかし実際それが授業の(あるいは授業外の)どのような場面でどのように活用されているのかについては未知の部分が多く、主体的・対話的な学習が効果的に促進されているのか疑問が残る。本章ではタブレット PC を活用した協働的な学びに焦点を当て、静岡県の私立中学校・高等学校での実践を報告し、活用事例を共有したい。タブレット PC の使用が協働的な学びの促進や学習者の動機付けになっているのかという疑問に加えて、学習者の心身への影響はあるのかといった懸念もある。学習者や実際に学習者を観察している指導者の自由記述による感想を踏まえ、それらの案件も考察する。

フォーラム③　M-12 (M 号館１F）（13:20-14:20）

研究法ワークショップ：「どうすれば初心者でも実践研究を始めることができるか？」

提案者：南 侑樹 （神戸市立工業高等専門学校）

"本発表では、探究的な学びのプロセスとしての実践研究の意義と、継続のための方略に言及しつつ、特に初心者が無理なく取り組めるアプローチを提案する。
実践研究とは、実践に根ざした問いを立て、その問いに答えるための実践を行い、収集したデータの分析・解釈を通じて実践の理解・改善につなげる営みである。実践研究には「理解型」と「課題改善型」の二つの問いがあるが、本発表では初めて実践研究に取り組む方により適した「理解型」に焦点を当てる。理解型の問いとは、教師自身、学習者、実践の現状をより深く理解するための問いである。
実践研究におけるデータは、テストの点数だけでなく、日々の授業記録、学習者との会話、教師自身の省察なども含まれる。これらの多様なデータを継続的に記録・蓄積することが、教師自身、学習者、実践の理解を深める鍵となる。学術研究では客観性が重視される一方、実践研究では教師の主観もデータ収集や分析・解釈では重要な要素となる点も強調したい。
最後に、実践研究の主体は教師自身であることを確認する。実践を通じて生じた違和感や疑問を丁寧に分析・解釈し言語化することで、聴衆や読者が共感できる形で研究プロセスを物語ることが肝要であることを述べる。"

課題別研究プロジェクト②　M-11 (M 号館１F)（13:20-14:20）SNSx

「中・高等学校の『思考力・判断力・表現力』を育成する言語活動および評価方法の開発と検証」
（1 年目発表）

代表： 津久井 貴之 （群馬大学）
共同：奥住 桂 （埼玉大学）
駒井 健吾 （長野保健医療大学）
田中 真由美 （武庫川女子大学）
吉崎 理香 （富山国際大学）

中・高等学校における「思考力、判断力、表現力等」（以下「思・判・表」）の育成を目的とした言語活動および評価方法の開発をめざす本研究の 1 年目では，「インプット」「やり取り」「発表」の指導研究 3 班，「パフォーマンス評価」「ペーパーテスト」の評価研究 2 班を設け，各領域における課題整理や研究を進めてきた。指導班では，読んだ内容をもとに考えを形成するための批判的読解や，教科書活用とやり取り活動を統合した指導の方向性，「目的や場面，状況等」の設定と「真正さ」の関係性などを検討してきた。また，評価班では，単元内の言語活動の一貫性を担保するためのルーブリックの作成などに取り組んできた。各班共通の課題としては，①単元目標・言語活動・評価の整合性，②「目的や場面，状況等」の設定と教科書題材・本文との連動性，③「思・判・表」を育成する指導・支援の評価への接続のあり方，が挙げられる。今回の発表では，各班からの具体的な検討成果を報告する。また，教科書題材・本文を柔軟に活用しながら領域を統合した言語活動を単元レベルで設計し，指導と評価の両面に資するセルフチェックリストの試案作成を行う 2 年目の構想を共有する。

現在，「思考力，判断力，表現力等」（以下「思・判・表」）に関わる指導や評価が，学校現場の課題となっている。本プロジェクトは，「思・判・表」の育成に向けて，中・高等学校における言語活動の設計および評価方法を実践的・実証的に検討することを目的としている。1 年目は，5 つの研究班での現状分析や課題整理を行った。さらに，研究の焦点を定めるために，学習指導要領における「読むこと」領域の目標のキーワード（必要な情報，概要，要点）をベースに大きく 3 グループに再編した。2 年目は，1 年目の成果と課題を生かし，領域統合型の言語活動を組み込んだ単元の指導・評価計画を実施しながら，モデル提案と教師の指導・評価の改善に資するチェックリスト作成を進めていく計画である。3 年目には，指導案やチェックリストの実践・検証を通して，具体的な活動例と評価ツールを明示する予定である。プロジェクトメンバー14 名の所属先は広域にわたっている。今後は，中・高等学校で実践を行ってもらう研究協力者の拡充を図る。実践の検証や分析においては，多様な地域・授業実践の背景を取り込むことで，多角的かつ実効性のある提案につなげていく予定である。

課題別研究プロジェクト③　Y-15 (Y 号館 1F)（13:20-14:20）

「学習者のエンゲージメントを高める言語活動のデザインと指導」
（2 年目発表）

代表: 藤田 卓郎 （福井工業高等専門学校）
共同：青山 拓実 （明治大学）
天野 修一 （広島大学）
上田 外史彦 （金沢学院大学）
樫村 祐志 （明治大学大学院生）
河合 創 （福井大学教育学部附属義務教育学校）
菊原 健吾 （松本大学）
山田 慶太 （豊田工業高等専門学校）
Li Olga （富山県立大学）

本プロジェクトの目的は、日本の様々な英語学習環境において、学習者のエンゲージメントを促進・阻害する要因について明らかにし、エンゲージメントを高めるような言語活動のデザインや指導法について実証的・実践的な観点から検討・提案することである。プロジェクトの 2 年目にあたる今年度は、1 年目に行ったエンゲージメントの定義および周辺概念との類似点の整理を踏まえ、エンゲージメントを高めるための授業実践を大学、高専、中学校で実施し、データの収集・分析を行った。今年度はこの中でも大学での英語ライティング活動の実践に焦点を当て、認知的・行動的・情意的側面と教師の認知的側面の観点から学習者のエンゲージメントを高める言語活動の指導について議論する。

第 1 発表（Li Olga・菊原健吾・藤田卓郎）：大学生の英語ライティング活動におけるフィードバックの違いが学習者のエンゲージメントに与える影響

第 1 発表では、ライティングにおいて異なる種類のフィードバックを与えた際に、学習者の書き直し活動に対するエンゲージメントにどのような違いが見られるかを調査する。大学 1 年生を対象に 4 回のライティング活動を実施し、それぞれ異なるフィードバック手法（生成 AI、ピア・フィードバック、教師のフィードバック、自動校正ツールを用いた自己修正）を用いて書き直し活動が行われた。学習者のエンゲージメントは、認知的・行動的・情意的側面から分析した。認知的エンゲージメントについては、生成 AI とのやり取りログ、学習者同士による書き直し活動時のインタラクションの録音・書き起こし、および刺激想起（stimulated recall）インタビューの録音・書き起こしを収集し、質的に分析した。行動的エンゲージメントについては、学習者のライティング成果物を収集し、量的・質的に分析した。情意的エンゲージメントについては、各回の書き直し活動後に実施した振り返り記述をデータとし、同様に量的・質的に分析した。本発表では、これらのデータをもとに、フィードバックの手法によって学習者のライティングの書き直し活動活動におけるエンゲージメントがどのように異なるかを認知的・行動的・情意的な側面から考察する。

第 2 発表（菊原健吾・Li Olga・藤田卓郎）大学生のライティング書き直し活動におけるエンゲージメントの捉え方—実践者の視点に基づく分析—

第 2 発表では、第 1 発表の実践者が自身の授業実践を振り返り、大学生英語学習者の書き直し活動におけるエンゲージメントをどのように捉えたかについて検討した結果を報告する。学習者は英語によるライティングタスクに取り組み、4 種類の書き直し活動を行った（第 1 発表）。活動後、第 1 発表者および第 3 発表者が実践者に対して半構造化インタビューを実施し、エンゲージメントの度合いを 10 点満点で評価してもらい、その理由を深掘りする質問を行った。得られたインタビューデータに対してテーマ分析を行った結果、エンゲージメントが高いと判断された指標として、「表情や態度の変化」や「ライティング内容の改善」などが、逆に低いと判断された指標としては、「活動への

取り組み時間の短さ」や「ライティング内容の未改善」などが抽出された。発表では、これらのテーマおよびサブテーマの具体例を紹介し、実践者視点で捉えられたエンゲージメントの特徴と、これまでに整理されてきたエンゲージメントの各側面との比較を行う。

自由研究発表　第１日

自由研究発表 第 1 室（Y-11） 1 日目① (14:40-15:10)

英語ライティングにおける機械翻訳利用とプロダクションの関連について

市川 裕理 （豊田工業高等専門学校）

本研究では、英語ライティングを行う際に機械翻訳や生成 AI などのツールが、どの程度英語理解のための足場かけになるのかについて調査した。学生はトピックについて学生同士、教員との対話を行った上で、各自の判断でツールを用いてライティングに臨んだ。ライティングにおいて学生が有用性を感じていること、使用ツールとその頻度、使わない場合とのライティング結果とどのような関連が見られるのかについて述べる。

自由研究発表 第 1 室（Y-11） 1 日目② (15:15-15:45)

ライティングの修正段階における生成 AI の活用について —英語を専攻する学生を対象として—

宮腰 宏美 （常葉大学）

2024 年度の授業において、機械翻訳機能や AI（ここでは Google 翻訳および ChatGPT）を効果的に使用することができないかという研究を行った。授業では、学生同士によるピア・レビューを行わず、教員が初稿のレビューを行い、それを受けて学生が修正を行う際に、前期は Google 翻訳、後期は ChatGPT を使用し、最終的に修正されたものを学生同士が読み合うという試みを行った。

Google 翻訳、ChatGPT の使用前には、先行研究と同じように、学生のそれらの使用への懸念が見られたものの、後期第 15 回には、Google 翻訳や ChatGPT を使用した修正について、質問紙に回答した全員が「良かった」「まあ良かった」と回答した。

自由研究発表 第 1 室（Y-11） 1 日目③ (15:50-16:20) SNSx

生成 AI を活用した自由英作文指導

山本 孝次 （愛知県立刈谷北高等学校）

入試対策の自由英作文指導に生成 AI を活用した。教員による英作文の添削は負担が大きく効率が悪い。生徒の側では、添削された英作文を書き直している時間がない。書き直さなければ、いくら添削されてもライティング力は向上しない。この課題を解決するため、生徒が初稿を自分で生成 AI を活用して修正する実践を行った。その結果は、生徒が自身で間違いを修正したものの、自由英作文の初稿での評価が明確に上がることはなかった。

自由研究発表 第 1 室（Y-11） 1 日目④ (16:25-16:55) SNSx

AI 時代に求められる英語学習の再設計

清水 公男 （千葉大特任講師）

AI 活用による個別最適化された学習が可能になり、知識やスキル獲得の手段が変容しつつある。一方で、「人間はこれから何をいかに学ぶべきか」という根本的な問いも生まれた。本発表では、ブリティッシュ・カウンセルの実施した「AI と英語教育」をテーマにした AI 活用の実践に関する系統的レビュー（2024）を分析し、知識を AI に任せる時代に求められる学びを明確にし、それを育成するための学習の在り方について考察する。

自由研究発表 第 1 室（Y-11） 1 日目⑤ (17:00-17:30)

生成 AI を活用した中高英語教材の制作支援と授業 DX 化の試み

野田 明 （鎌倉女子大学）

本研究では、生成 AI を活用して中学高校の英語教材を自動生成し、授業の DX 化と教員の教材作成負担軽減の可能性を検証する。紙教材をデジタル化し、音声教材、要約、簡易英文を作成させたり、教科書を読み込ませて、問題作成、多技能展開がどれほど可能であるかを制作物をもとに分析した。その際、懸念される学習者の習熟度への適合性、作成された表現の正確性、誤答やハルシネーションの有無についても実証的に評価した。

自由研究発表 第 2 室（Y-12） 1 日目① (14:40-15:10)

英作文演習における紙ベース学習とアプリベース学習の効果比較：語句整序問題を用いた実践研究

福嶋 雅直 （大和大学）

本研究では、英作文演習アプリ「作文くん」を開発し、紙ベースとアプリベースの語句整序学習の効果を比較検討した。ICT の専門知識が乏しい教育現場でも活用可能なアプリの開発を目指し、大学 2 年生を対象に実証実験を実施した。両学習法のメリット・デメリット、アプリの特長を踏まえ、教育現場における効果的な学習方法の選択について考察する。また、ICT 活用が個別最適な学びに与える可能性についても提言を行う。

自由研究発表 第 2 室（Y-12） 1 日目② (15:15-15:45)

ICT の即時性を利用したライティング指導の導入と生徒の文法学習とライティングについての意識の考察

神戸 玲子 （目白研心中学高校）

大学入試での外部資格試験の導入が一般的になる中、中高生から writing 指導を求める声は高まっているが、生徒の文法知識についての習熟度によっては、論理表現の授業で明示的指導に多くの時間が必要となり、writing の指導まで手が回らない場合も多い。本研究では即時性のある生徒同士の writing のやりとりを ICT を用いて授業内に行うことで、生徒に起きた writing に関する意識の変化と彼らが明示的指導と writing をどのように関連付けているかについて考察する。

自由研究発表 第 2 室（Y-12） 1 日目③ (15:50-16:20)

赤と青のインクが英作文フィードバックに与える影響

髙橋 ゆかり （産業能率大学）

本研究は、英作文添削に使用する赤インクと青インクが学習者に与える影響に違いがあるかを検証することを目的とした。大学 1 年生 85 名を対象に、4 週間にわたり週 2 回英作文課題を実施し、赤・青の 2 色の異なるインクでフィードバックを行った。課題終了後、学習者の意識調査をアンケートで実施した。また本発表では、英語教師 112 名に対して行った、添削時に使用するインクの色に関する調査結果についても併せて報告する。

自由研究発表 第 2 室（Y-12） 1 日目④ (16:25-16:55) SNSx

英作文の主語のバリエーションを増やすためのアプローチ～中学校における実践研究～

横山 奈央 （京都市立洛西陵明小中学校）

本研究では、中学生の自由英作文において、人称代名詞以外の主語を適切に使いこなせる生徒が少ないという課題に着目した。生徒のつまずきや困りを詳細に分析し、読みの活動を活用して主語の使い方への意識を高めること、また教師によるクラス全体への英作文のフィードバックを通じて主語のバリエーションを増やすことに取り組んだ実践研究である。

自由研究発表 第 3 室（Y-13） 1 日目① (14:40-15:10)

プロジェクト型学習を通してエンゲージメントを引き出す工夫 － 2 年間の実践による成果と課題 －

鈴木 卓 （東京科学大学附属科学技術高等学校）

本発表は，高校 1 年生を対象に実施したプロジェクト型学習を通して生徒のエンゲージメントを引き出す工夫を報告する。対象生徒への質問紙調査の結果， 8 割以上の生徒がエンゲージし，プロジェクトの「創造」「協働」「表現」に関わる部分にエンゲージしたことがわかった。また，プロジェクトと英語授業の指導内容の関連性や，プロジェクト期間中の英語授業の指導内容がエンゲージメントの向上に寄与する可能性が示唆された。

自由研究発表 第 3 室（Y-13） 1 日目② (15:15-15:45)

高校英語教育における理想 L2 自己を育む指導

板坂 柚果 （黒部市立清明中学校）
岡崎 浩幸 （富山大学大学院教職実践開発研究科）

本研究は、高校英語教育における動機づけストラテジー(MS)が、大学生の理想的な英語学習者像(理想 L2 自己)に与える影響を調査することを目的とした。高校時代における MS 経験とその評価、および現在の英語学習動機に関するアンケート結果から、理想 L2 自己に関連する MS の経験は少なく、評価も低いものの、その経験が大学での理想 L2 自己の向上と自主的な英語学習に寄与していることが明らかとなった。

自由研究発表 第 3 室（Y-13） 1 日目③ (15:50-16:20) SNSx

ICT 活用が英語学習の意欲向上に与える影響 －高校生を対象とした質問紙調査から－

山内 みゆき （愛知県立大学大学院生）

本研究の目的は、ICT のどのような機能や特徴が英語学習に抵抗感を持つ高校生の学習意欲を高めるのかを、質問紙調査により分析・考察することである。1 年生授業で ICT ツールを一定期間活用した後、意識調査を行った。結果から、テスト機能はゲーミフィケーション要素により生徒の学習への意欲を高め、提出機能は不安を軽減すること、さらに音読課題は即時フィードバックを促して動機づけを高めることなどが確認された。

自由研究発表 第 3 室（Y-13） 1 日目④ (16:25-16:55) SNSx

教師の統制指導がディスエンゲージメントつながるプロセス

染谷 藤重 （京都教育大学）

本研究では、学生の教師の統制指導の認知が基本的心理欲求及び無動機づけを経てディスエンゲージメントへと向かうプロセスについて検証を行う。参加者は、近畿地方の大学生 320 名であった。共分散構造分析を行った結果、統制指導の認知→基本的心理欲求阻害→無動機づけ→ディスエンゲージメントというプロセスが適したモデルであるということが明らかとなった。

自由研究発表 第 4 室（LC-11） 1 日目① (14:40-15:10) SNSx

Teacher Agency in Context: Exploring the First-Year Experiences of JET Teachers

Yamamoto Yuya （The State University of New York at Buffalo, a Ph.D. student）

This qualitative case study examines how two assistant language teachers in the Japan Exchange and Teaching (JET) Program, both holding master's degrees in English teaching, exercise their agency during their first year. It also explores how various factors, including teacher training programs, influence this process. Drawing on an ecological perspective of teacher agency, data from participant information forms and semi-structured interviews were analyzed using thematic analysis to identify factors supporting or constraining their agency within the Japanese school context.

自由研究発表 第 4 室（LC-11） 1 日目② (15:15-15:45) SNSx

英語教師のウェルビーイング：学習者に多様な影響を与える教師の特徴

大場 浩正 （上越教育大学）

本研究の目的は、学習者に多様な影響を与える教師のウェルビーイングを明らかにすることである。中学校の英語教師と他教科の教師および小学校教師を対象に、前田（2017）によるウェルビーイングを構成する 4 つの因子（自己実現と成長、つながりと感謝、前向きと楽観、独立とあなたらしさ）を用いた質問紙調査を行った。結果として、英語教師は、他の教師に比べて「独立とあなたらしさ」以外の因子において高い傾向を示した。

自由研究発表 第 4 室（LC-11） 1 日目③ (15:50-16:20) SNSx

小学校教員養成課程にある学生の認知―学習者としての経験、講義、教育実習による影響―

滝沢 雄一 （金沢大学）

本発表では、小学校教員養成課程にある学生の認知について、(1)英語の指導に関してどのような信念や知識に基づいて授業計画を作成するのか、また、(2)その信念や知識の形成に学習者としての経験、教育実習、講義はどのような影響を与えているか、また、(3)信念や知識は教育実習や講義を通じてどのように変容するか、を研究課題とし、質問紙、インタビュー、講義の振り返りシート等を分析した結果を報告する。

自由研究発表 第 4 室（LC-11） 1 日目④ (16:25-16:55)

英語教師に必要な専門能力に対する自信を持つための方法に関する調査

杉田 由仁 （明治学院大学）

「英語教師に必要な専門能力に対する自信」に関する第 1 次調査 (杉田, 2024) において、英語指導力対する自信は「話すこと」「技能統合型活動」「書くこと」「文法」の指導と関連性を持つことが確認された。第 2 次調査では、どのようにすればこれらの指導領域における自信を持つことができるか、中学校・高等学校における長年の実践経験をお持ちの先生方に自由記述形式で回答を依頼した。回答データを質的に分析した結果を報告する。

自由研究発表 第 4 室（LC-11） 1 日目⑤ (17:00-17:30)

小学校外国語科における　Dörnyei の過程志向アプローチを活用した「読み書き」の指導

高橋 美由紀 （愛知教育大学名誉教授）

小学校外国語科の教科書では、「Sounds and Letters」や「Let’s Write and Read」などの活動が導入され、「知識・技能」の習得にとどまらず、動機づけを重視した教材が求められる。本研究では、Dörnyei の過程志向アプローチを取り入れ、デジタル教科書やインターネット検索、ワークシートなどを活用し、文字を書く活動を組み合わせることで、小学校高学年児童にとって最適な学びを探究した。

自由研究発表 第 5 室（LC-12） 1 日目① (14:40-15:10)

北陸地方 X 県における公立小学校児童の文法意識の研究－使用基盤理論の観点から—

澀谷 順子 （青山学院大学）

使用基盤理論を背景に、公立小学校児童の英語の文法意識を明らかにすること目的としている。北陸地方 X 県の 5 年生 153 名、6 年生 147 名が参加し、文法のテストを受験した。
分析の結果、児童の文法意識は morphological level から syntactic level へと発達を遂げており、さらに日本語の知識を使っていることが示唆された。また、英語の摂取頻度が文法意識の発達に影響を及ぼすことが示された。

自由研究発表 第 5 室（LC-12） 1 日目② (15:15-15:45)

日本人大学生の明示的・暗示的文法知識—文法項目間の違いと自動化との関連性に着目して—

髙橋 あさ美 （北海道教育大学大学院生）
内野 駿介 （北海道教育大学）

本研究では、日本人大学生の明示的・暗示的文法知識の習得度と文法知識の自動化の実態を調査した。分析の結果、明示的・暗示的知識の習得度には文法項目間で差があった。明示的知識の習得度が高いのは複数形の-s と未来時制であった。明示的知識を持っていないが暗示的知識を持っている参加者の割合が多いのは否定形だった。自動化の度合いにも文法項目間に差があったが、明示的・暗示的知識の習得度との関連は見られなかった。

自由研究発表 第 5 室（LC-12） 1 日目③ (15:50-16:20) SNSx

英文法学習難易度順序調査 –動詞の目的語となる to 不定詞補部と動名詞補部の場合–

白畑 知彦 （静岡大学（名誉教授））
岡村 明夢 （静岡県立大学）
須田 孝司 （静岡県立大学）
鈴木 智久 （静岡城北高等学校）
望月 孝太 （静岡城北高等学校）

大学生(JLEs)を調査対象者とし、英語の他動詞構造で目的語となる 2 つの形式（to 不定詞補部と動名詞補部）の学習難易度順序を明らかにする。どちらの補部を取るかは動詞ごとに異なり、そこには何らの言語学的規則は存在せず英語特有の規則として学習しなければならない。日本語にはこのような区別化は存在しない。よって、母語からの転移が起こり得ないことになる。このような学習状況下で、JLEs はどのように学習して来たのか調査した。

自由研究発表 第 5 室（LC-12） 1 日目④ (16:25-16:55)

小学校の英語授業で身に付けた資質・技能を生かした中学校 1 年生に対する英語授業

岩本 藤男 （焼津市立大富中学校）

小学校で英語授業が始まり、中学校の教師は生徒の実態に慣れ始めてきたが、まだ戸惑うことが多い。そこで小学校学習指導要領の内容や先行研究から小学生が身に付けた資質・技能をまとめ、それらを生かした授業実践を試みた。そして中学校の授業をどのように感じたか 1 年生の 3 学期の終わりに意識調査と文法能力調査を実施した。その結果を基に今後の授業改善の方向性を検討したい。

自由研究発表 第 5 室（LC-12） 1 日目⑤ (17:00-17:30) SNSx

日本語を母語とする英語学習者における法助動詞の意味に関する理解

坂井 歩紀 （静岡大学大学院生）
大瀧 綾乃 （静岡大学）

本研究は、英語学習者による法助動詞(can, may, must, should, will)の理解の程度を明らかにする。法助動詞には根源的および認識的用法が存在し、中学校教科書分析の結果、認識的用法の数の方が少ないことが分かった。大学生に多肢選択式問題による調査を行い、may の根源的及び should と will の認識的用法への正答率が低く、教科書での法助動詞の出現回数と用法に関連があると分かった。

自由研究発表 第 6 室（LC-13） 1 日目① (14:40-15:10)

匿名電子掲示板活用によるライティング力の変化と多重知能との関係

阿久津 仁史 （中央学院大学）

113 名の大学に対して匿名電子掲示板を活用したコメントフィードバックを英語で行う活動を 6 回行った。5 つの評価項目で 4 人のネイティブに英語ライティングを評価して貰ったところ、事前事後で 1%水準でライティング力の伸びを示した。それを踏まえ、Gardner の多重知能理論を用いて、その効果が大きい学習者を検証した結果、 8 つの知能特性のうち、内省的知能が高い学習者に対して特に効果が高いことが明らかになった。

自由研究発表 第 6 室（LC-13） 1 日目② (15:15-15:45) SNSx

大学 1 年生による英語及び日本語ライティング観について—インタビューおよびプロダクトに基づく事例研究—

伊東 哲 （植草学園大学）

本研究は大学 1 年生がどのような価値観の下で文章を産出するのかを明らかにすることを目的とする。参加者 2 名が日英ライティング課題を行い、インタビューに答えた。インタビューでは文章を書く際に「何を大事にしているか」を尋ねた後、自身が書いた文章について振り返ってもらった。その結果、ライティングを行う際に、英語では自分なりの強い規範に則り書いているが、日本語では書き出した流れで書き続ける傾向がみられた。

自由研究発表 第 6 室（LC-13） 1 日目③ (15:50-16:20) SNSx

オンライン国際交流 2 回実施による交流の深まり ～伝え合う喜びを体感できる授業を目指して～

小山 陽子 （茅ヶ崎市立香川小学校）

イータンデム・オンライン国際交流を小学 6 年児童とオーストラリアの Year7 と Year8 の生徒とで 2 回実施した。交流では英語と日本語を併用し、学習者中心の内容を重視したやり取りを目指した。本発表では、交流を複数回実施するための工夫や改善点を示し、交流が学習者の英語学習に与える影響などについて質的データ分析を基に考察する。交流を通して、学習者がコミュニケーションの喜びを体感できる授業を提案したい。

自由研究発表 第 6 室（LC-13） 1 日目④ (16:25-16:55) SNSx

同時双方向型オンライン授業と対面授業における EFL 学習者の情意の比較

切刀 あゆみ （山梨大学非常勤講師）

オンライン授業の研究は、新型コロナウイルスの流行前からなされていたものの、教育現場ではその特徴や効果を十分に理解しないままオンライン授業の実施に至った経緯がある。本研究では、日本の大学の EFL 学習者 106 名を対象に、同時双方向型オンライン授業と対面授業における学習者の情意面を量的・質的に比較した。オンライン授業は快適度や学びやすさで高評価を得て、対面授業は対人コミュニケーションの充実という利点が示された。

自由研究発表 第 7 室（LC-15） 1 日目① (14:40-15:10) SNSx

大学受験英作文指導におけるルーブリックの共同構築と運用上の課題

二羽 歩 （小松市立高等学校）

本事例研究では、大学受験英作文指導において、教師と生徒がルーブリックを共同で構築し、それを用いて教師による評価だけでなく、生徒自身による自己評価も行うという指導実践を対象とし、そのプロセスにおける課題と改善策の検討を目的とした。分析の結果、ルーブリックの作成段階および使用段階において、いくつかの問題点が生徒の発話記録や記述から明らかとなり、これらを踏まえて具体的な改善策について考察した。

自由研究発表 第 7 室（LC-15） 1 日目② (15:15-15:45) SNSx

英語学習における自律的学習者の育成～形成的評価としてのパフォーマンステストを通して～

中川 拓也 （富山大学教育学部附属中学校）

自律的学習者の育成には、授業の課題を「自分ごと」として捉えさせること、そして自分の成長を実感させることが重要です。本実践では、パフォーマンステストを動画撮影し、生徒自身に振り返りさせることで、パフォーマンスを改善させました。また、その際に使用するルーブリックを生徒主体で作成させることで課題を「自分ごと」として捉えさせました。

自由研究発表 第 7 室（LC-15） 1 日目③ (15:50-16:20) SNSx

The impact of routine practice and formative assessment on impromptu speaking in junior high school

Hagihara Kosuke （奈良県立国際中学校・高等学校）

This presentation will focus on a routine speaking activity and formative assessment for first-year junior high school students. They practiced speaking on four topics in a routine activity. During the third topic, their speeches were recorded and sent to the teacher, who then gave feedback to each student as a formative assessment. Finally, the students gave impromptu speeches to our ALT as a summative assessment. The presenter will share the results of a post-questionnaire and reflections from the students.

自由研究発表 第 7 室（LC-15） 1 日目④ (16:25-16:55)

MET 得点と共通テスト (2024) 英語総合得点・英検 2 級得点との相関

池田 真由子 （岐阜大学学部生）
宮﨑 順大 （岐阜大学学部生）

本稿は、研究課題「MET 得点と共通テスト=CT (2024) 英語総合得点・英検 2 級得点との間に統計的有意な相関があるか？」に取り組んだ。2024 年 10 月に、これら 2 つのいずれかの得点を保持する英語学習者 25 名に MET を実施した。その結果、MET 得点とこれらの各得点との間に統計的有意な強い相関があることが分かった（CT: $r = .79$, $n = 17$, $p < .05$、英検: $r = .76$, $n = 24$, $p < .05$）。

自由研究発表 第 7 室（LC-15） 1 日目⑤ (17:00-17:30)

英検と臨時教育審議会 ：「検定試験などの結果の利用」明記の過程

孫工 季也 （金沢学院大学）

英検の学校教育への関与が強まる背景に何があったのか。この問いに対し, 先行研究は臨教審での「第三者機関で行われる検定試験などの結果の利用も考慮する」という明記の影響を指摘してきた。しかし先行研究は明記の過程の解明には至っていない。そこで本報告では, 国立公文書館に保管されている会議記録をもとに「国際化に関する委員会」での議論を精査し, 当文がどのような経緯の中で明記されたのかを検討する。

自由研究発表 第 8 室（LC-16） 1 日目① (14:40-15:10)

日本人英語学習者にみられるスペリングエラーの傾向とその要因の分析

新田 泰祐 （静岡県立浜松北高等学校）
須田 孝司 （静岡県立大学）

本研究では、高校生から大学生までの日本人英語学習者(JLE)を対象とし、英単語のスペリングエラーについて検証する。英単語を書くためには、英語独特の規則を習得する必要があるだけでなく、日本語発音の影響などを取り除く必要がある。実験では 168 個の日本語を英語に直してもらったが、置換、挿入、脱落、転置などのスペリングエラーが観察された。本発表では、各エラーを特徴ごとに分類し、その要因について議論する。

自由研究発表 第 8 室（LC-16） 1 日目② (15:15-15:45) SNSx

絵の刺激に関する日本語と英語の単語認識反応速度の違い

和田 順一 （松本大学）

大学生 8 名と流暢な英語話者 1 名を実験協力者とし、単純な絵（動物、野菜、果物のみの絵）による刺激を与え、それに対する日本語と英語それぞれにおける正誤一致問題（正答も誤答も有意味語）に対する反応速度を Inquisit を使用しミリ秒の単位で計測した。問題は日本語・英語ともに各 40 問であり、その各言語のテストの中で、絵刺激の後にランダムに出現する語彙が絵と一致するかどうかを実験協力者は判断した。

自由研究発表 第 8 室（LC-16） 1 日目③ (15:50-16:20)

小学校外国語科検定教科書付属絵辞書の動詞イラストの意味伝達力の検討—大学生を対象とした単語想起課題の結果から—

内野 駿介 （北海道教育大学）
佐藤 選 （東京学芸大学）

小学校外国語科検定教科書付属絵辞書に収録されている 37 の動詞（句）を対象に、イラストが表す語句を想起する課題を実施した。対象は大学生 200 名であり、各語句につき 3 種類のイラスト計 111 問を提示した。正答率、誤答率、「わからない」と回答した割合に基づく分析の結果、調査対象の語句は主に正答率の高低によって 3 つのクラスターに分類された。単語間およびイラスト間の正答率のばらつきから、意味伝達力の違いが示唆された。

自由研究発表 第 8 室（LC-16） 1 日目④ (16:25-16:55)

中学校英語科における協同学習の授業実践 －語彙テストを通じたジグソー法の効果の検証－

松尾 厚志 （大垣市立川並小学校）

現行の学習指導要領のキーワードは「主体的・対話的で深い学び」であり、「主体的・対話的で深い学び」(アクティブ・ラーニング)の視点に立った授業改善を行うことが明記されている。「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、中学校英語科の授業実践において、生徒が語彙を習得するための１つの手法として、生徒同士の協同学習(ジグソー法)が有効であるかを検証した。

自由研究発表 第 8 室（LC-16） 1 日目⑤ (17:00-17:30) SNSx

現代英語における重要ブースター・ヘッジの考察と L2 英語教育への示唆：CORE コーパスの 33 レジスター別頻度を踏まえて

飯島 真之 （神戸大学大学院生）

現代英語において、「ブースター」や「ヘッジ」（Hyland, 2019 他）は主張の強弱調整に重要な役割を果たす。本研究は、Yang（2013）や Wang & Jiang（2018）等のブースター・ヘッジの品詞分類枠を踏まえ、多様な英語使用場面（レジスター）を包含する CORE コーパスを使用し、（1）頻度と汎用度の高いブースター・ヘッジの特定（rather, probably, always 等）や（2）個別表現と個別レジスターの関係性の解明（対人性や客観性の程度等）を行い、英語教育への示唆を得る。

自由研究発表 第 9 室（LC-21） 1 日目① (14:40-15:10) SNSx

小学校 6 年生における、オーストラリア Year 6 とのビデオチャットによる国際交流を通じた意識の変容

矢萩 美貴 （長野県辰野町立辰野東小学校）

クラス内での「話すこと［やり取り］」の活動は、互いに情報を共有しているためインフォメーションギャップが生まれにくい。そこで、より真正性の高いコミュニケーションを目指し、オーストラリアの Year6 児童とのビデオチャット交流を実施。児童たちのやり取りの様子と実施後の言語意欲や異文化理解への変化について報告する。

自由研究発表 第 9 室（LC-21） 1 日目② (15:15-15:45) SNSx

大学生の英語学習に対する意識と基礎英語力の関係

大畑 真也 （天理大学）
須田 孝司 （静岡県立大学）

本研究では、日本の大学生の英語学習に対する意識と基礎英語力の関係について調査する。ベネッセの英語学習に関する意識調査（2022）では、英語が好き/得意と回答した高 3 生が約 4 割いる一方で、英語が嫌い/苦手と回答した高 3 生も約 4 割いた。大学生は英語の何が苦手で英語のどのようなところが嫌いなのであろうか。本研究は大学生の英語学習に対する意識と実際の英語力を調査し、学習者の英語に対する苦手意識の要因を検証する。

自由研究発表 第 9 室（LC-21） 1 日目③ (15:50-16:20) SNSx

要約の目的を意識した「読んで書く」活動の実践:高校生による Bana さんへの手紙

須野原 美香 （長野県中野西高等学校）
菊原 健吾 （松本大学）

実践者は高校生に対し要約活動を行ってきたが要約すること自体が目的になっていた。本実践では高校 1 年生が Dear World: Bana’s War を読み、感銘を受けた点（要約）と今後自分ができることを含めた Bana さんに宛てた手紙を書いた。何故要約するのかという目的を意識した「読んで書く」活動の中で、生徒がどのように手紙を書いたか分析した。要約や意見の質の差から今後の指導の方向性について議論する。

自由研究発表 第 9 室（LC-21） 1 日目④ (16:25-16:55)

看護英語オーラルコミュニケーションの語用論の視点による学びの継続 —学生の気づきと意識の変化について—

高畑 伸子 （山梨大学非常勤）

看護英語の Oral Communication は ESP として、現場での実践的な学びに繋がる可能性が高い。多くの教科書が医療関連の語彙や豊富な会話例を提示しているが、シンプルに見える英語のやり取りの持つ意味や用法についての認識には語用論の視点が不可欠である。会話を自分で考えた後で、それらが伝えうる意味を再考する学びを継続的に行った。そこから得た学生の気づきや意識の変化を報告する。

自由研究発表 第 9 室（LC-21） 1 日目⑤ (17:00-17:30)

Raising High School Students' Awareness of English Diversity through a GELT Project

黒木 浩亮 （大阪府立水都国際中学校・高等学校）
藤原 康弘 （名城大学）

This presentation outlines our GELT research project. The research questions were: 1. What are the senior high school students' attitudes towards the diversity of English before joining the project? 2. To what extent and in what ways will their attitudes towards English language diversity change throughout the project? Semi-structured interviews and reflective journals were employed to collect the data. Participants became more aware of English diversity, and gained confidence in speaking English. Furthermore, they developed their critical language awareness.

自由研究発表 第 10 室（LC-22） 1 日目① (14:40-15:10) SNSx

中学校における読むことの指導—必要な情報を読み取り、概要・要点を捉える—

伊佐地 恒久 （岐阜聖徳学園大学）
田中 真由美 （武庫川女子大学）
佐藤 大樹 （国立教育政策研究所）

中学校学習指導要領に示されている「読むこと」の目標である必要な情報の読み取り及び概要・要点の把握は、思考力・判断力・表現力等の育成において重要な要素である。本発表では、令和 5 年度全国学力・学習状況調査における中学校英語の問題を素材に、これらの目標を達成するための各々 1 時間の授業例を提示する。学習指導要領に加えて、テキストタイプによる読みのプロセスの違いや読解ストラテジーを意識した指導例を示す。

自由研究発表 第 10 室（LC-22） 1 日目② (15:15-15:45)

「委ねる指導」が学習への主体性と「読むこと」の能力に与える影響

山田 誠志 （至学館大学）

中学生約 200 人を対象に、連続する 2 単元で、教科書内容を読み取る言語活動における学習方法を生徒に選択させる指導（以下「委ねる指導」）を実施した。その結果、「読むこと」への主体性は有意に高まり、「読むこと」の能力には上昇傾向がみられた。また、「委ねる指導」を実施する際教師に求められる役割についても考察した。その他、「主体性」とは何かについても検討したため、適切な学習評価に資する提案も行いたいと考えている。

自由研究発表 第 10 室（LC-22） 1 日目④ (16:25-16:55) SNSx

読書活動時に学習者が注意を向ける複数語表現の PoS-gram 分析

坂東 貴夫 （東洋大学）

大学 1 年生対象の必修英語授業において、多読用教材を読む際に気になった複数語表現を書き出すよう指示した。それらの PoS-gram(品詞連鎖)分析を行い、TOEIC-IP スコアに基づき分けた超初級(平均 164 点; 15 名)と初級（平均 355 点; 15 名)のデータを比較したところ、両群間で品詞連鎖の種類や頻度に違いが見られた。習熟度が上がるにつれ、より複雑な構造や語と語の関係性に注目することが示唆された。

自由研究発表 第 10 室（LC-22） 1 日目⑤ (17:00-17:30)

『不思議の国のアリス』の言葉遊びによる言葉への気づき

金子 史彦 （信州大学教育学部）

英語の言葉遊びによる、言葉への気づきについて考察する。言葉遊びは言語の特徴を活かしたものであるため、その翻訳について考えることによる言葉への気づきが期待できる。英語の言葉遊びとその言葉遊びの複数の和訳を与え、比較して考えさせることで、どのように英語・日本語それぞれの特徴への気づきが達成されるのか、『不思議の国のアリス』の言葉遊びを用いた調査で収集したデータの分析と、その考察を通じて発表する。

自由研究発表 第 11 室（LC-23） 1 日目① (14:40-15:10) SNSx

児童の英単語認識に関する研究 －「音声、意味、文字」のつながりと音素認識との関わり－

長崎 朱里 （愛知県一宮市立浅井南小学校）
巽 徹 （岐阜大学）

公立小学校 5 校、4～6 年生 623 名の協力を得て、英単語認識における「音声・文字・意味」各素性間の認識度合いと英単語の語頭・語尾の音素認識の度合いを調査した。その結果、音素認識が進んでいる児童ほど「音声と文字」「文字と意味」の認識も優れていることが明らかになった。また、語頭の音素認識は総英語学習時間の増加と共に徐々に高まっていた一方で語尾では音素認識が進みにくい傾向があることがわかった。

自由研究発表 第 11 室（LC-23） 1 日目② (15:15-15:45)

反転学習形式の発音トレーニングの改善と効果検証 —英語が苦手な大学生に着目して—

山本 大貴 （信州大学）
近藤 暁子 （兵庫教育大学）

近藤・山本（2024）が実施した反転学習形式の発音トレーニングは、発音向上に寄与し、高い動機づけを持って参加できる実践であることが示唆された。一方で改善点もみられ、参加者は英語が得意な大学生のみという限界もあった。そこで本研究は、その実践を改善したうえで英語が苦手な大学生にも実施し、効果検証した。その結果、英語が苦手な大学生も、発音向上の実感はやや薄いものの、高い動機づけを持って参加したことがわかった。

自由研究発表 第 11 室（LC-23） 1 日目③ (15:50-16:20)

小中高大の学習者の英語発音についての教員意識調査

西尾 由里 （名城大学）
上斗 晶代（県立広島大学名誉教授）

新学習指導要領によると小学校から高校までの英語教育の根幹をなすのはコミュニケーション能力をつけるというものである。コミュニケーションの基礎となる英語発音に関して，教員は自分の担当する児童や生徒がどのような発音をしていると認識しているかということを Survey Monkey を使ったアンケート調査により明らかにする。それにより、小中高大学までの英語音声学の包括的なガイドラインの作成の基礎データとする。

自由研究発表 第 11 室（LC-23） 1 日目④ (16:25-16:55) SNSx

小学校教員を目指す大学生を対象にした「英語音声学」授業における学習者の情意面を考慮した授業実践

羽尾 将司 （関西大学）

本発表では、小学校教員を目指す大学２・３生を対象に実施した「英語音声学」の授業実践報告を行う。発音指導に対して不安を感じる学習者がいることが明らかになっているため、指導においては学習者の情意面を考慮し、できる限り不安を軽減させるために、(a)協働学習を導入と(b)フィードバックの工夫を行った。その結果、多くの学習者が本授業実践に対して概ね肯定的な意見を持っていることが明らかになった。

自由研究発表 第 11 室（LC-23） 1 日目⑤ (17:00-17:30) SNSx

英語初学者の学習に対する認識とその背景

花木 柾哉 （一宮市立千秋中学校）

本研究は、英語初学者の中でも英語に困難を感じている中学３年生３名を対象に、半構造化インタビューを通して学習に対する認識やその背景を理解することを目的とする。英語の長文読解テストの得点をもとに対象生徒を抽出し、英語学習への意識、授業に対する印象、ペア活動やグループ活動などの学習形式の好み、英語学習の理想と現実のギャップなどについて質問し、学習者の理解を試みた。

自由研究発表 第 12 室（LC-24） 1 日目① (14:40-15:10)

タスク指導は日本人 EFL 学習者の予期的推論生成を促進するか？

前田 昌寛 （金沢星稜大学）

日本人 EFL 学習者に物語の次の展開を予測・記述させる課題の効果を検証した。SRT により予期的推論生成を評価したが、課題指示は有意な効果を示さず、低習熟者には逆効果の可能性も示唆された。予測文分析では、的外れ・過剰な推論が見られ、文脈の過剰一般化が原因と考えられる。

自由研究発表 第 12 室（LC-24） 1 日目② (15:15-15:45) SNSx

思考力・判断力・表現力を高める英語授業ー意見・考えを表出させるタスクを中心にー

紺渡 弘幸 （仁愛大学）
野本 尚美 （仁愛女子短期大学）

本研究で扱うのは、教科書での学習の後、その題材内容に関して意見・考えを表出させるタスクを設定・実施することにより「思考力・判断力・表現力」の向上を目指す指導法であり、自然なコミュニケーションの生起、スキルの統合、言語知識の定着や動機づけの促進等、多様な効果が期待されるものである。本発表では、この指導法を用いて短期大学生を対象に行った授業実践とタスクの効果、質問紙による調査結果の分析等について報告する。

自由研究発表 第 12 室（LC-24） 1 日目③ (15:50-16:20) SNSx

日本人大学生による非対格動詞の過度受動化の誤りに対する新高等学校学習指導要領の影響の一考察－2025 年度とそれ以前の入学生との比較において－

岡田 美穂子 （愛知学院大学）

英語学習者はしばしば自動詞の過度受動化の誤りを犯すことが指摘される。本研究では、新学習指導要領のもとでの高等学校の英語教育が、大学生の非対格動詞の過度受動化にどのような影響を及ぼしているかを、昨年度と今年度それぞれ 100 人前後を対象に実施した態判断に関するタスクの結果を比較検証し、自動詞の種類（非対格・非能格動詞）、英語の熟達度、主語の有生性の 3 要因に焦点を当てて考察を試みる。

自由研究発表 第 12 室（LC-24） 1 日目④ (16:25-16:55)

コミュニケーションの過程を振り返る方略とその効果：予測不可能なコミュニケーションが生まれるタスクを通して

稲葉 英彦 （静岡大学）

本研究は、中学校英語授業において、生徒自身がコミュニケーションを振り返る方略を通して、「よいコミュニケーション」の在り方を模索し、理想とするコミュニケーションの構築を目指す教材を開発、その成果を検証したものである。相互構築の視点が包含される課題設定とコミュニケーションを振り返る方略を授業展開に織り込み、生徒が思い描く理想のコミュニケーションの具体と振り返る際の相互の認識について明らかにする。

自由研究発表 第 12 室（LC-24） 1 日目⑤ (17:00-17:30)

CEFR を逆向き設計の枠組みとして教室に実装するための諸要件

駒井 健吾 （長野保健医療大学）

各校の CAN-DO リスト作成に際し推奨すべき参照枠として示された CEFR だが（文部科学省, 2013）、観点別評価における〈三観点〉枠組みの導入もあって、言語活動の頻度が増加しつつある今日の教室でもさほど活用されていないと考えられる。目標・指導・評価間に一貫性を担保するために、CEFR-CV（Council of Europe, 2020）の複合的設計とその理論的支柱たる Action-oriented approach（Piccardo & North, 2019）が果たせる役割について論じ、日本の教室に CEFR を実装するための諸要件を提示する。

自由研究発表 第 13 室（LC-25） 1 日目① (14:40-15:10) SNSx

英語発話の熟達度を予測する複雑さの構成要素の関係

広瀬 八重子 （東海学院大学）

本研究は、日本語母語大学生英語学習者 40 名の英語発話の統語構造に関わる複雑さに焦点をあて、４名による発話評価に基づく熟達度を予測する構成要素の関係を示すことを目的とした。先行研究で発話評価を予測する結果が示されている発話単位や節の平均長、節割合に基づく指標と、名詞句複雑さ、構文種類に基づく指標が有意な関係にあり、発話熟達度予測に名詞句複雑さと構文が寄与するという結果が示された。

自由研究発表 第 13 室（LC-25） 1 日目② (15:15-15:45)

言語活動の観点別評価に関する英語教師志望学生の発話の質的分析 ―理解の過程と評価観の形成に着目して―

川村 拓也 （石川県立金沢二水高等学校）

英語教師を志望する大学生が、言語活動とその観点別評価の規準・基準作成について、協働的に振り返った発話記録をもとに、大学生が観点別評価を理解する過程や、評価に対する多様な認識や葛藤のありようを、Abell & Siegel (2011）および石井（2016）のアセスメント・リテラシーの枠組みを援用して質的に分析した。本研究によって教師の評価リテラシーの形成過程を捉える一助となる知見が得られた。

自由研究発表 第 13 室（LC-25） 1 日目③ (15:50-16:20)

英語イマージョン授業における小学校低学年児童の発話と情緒面の分析

佐藤 貴弘 （サミットアカデミーエレメンタリースクール佐久）

本発表は、小学校低学年児童を対象とした英語イマージョン授業において、児童の発話の特徴と英語に対する気持ちのつながりに焦点を当てた調査報告である。
授業中の発話場面や内容、表情などの反応を観察・記録し、簡易的なアンケートを通して児童の英語に対する意欲や自信を読み取り、言語行動と情意面の特徴を整理する。現時点での観察・分析から見えてきた傾向について報告する。

自由研究発表 第 13 室（LC-25） 1 日目④ (16:25-16:55) SNSx

Team Teaching における ALT と JTE の使用言語

阿部 恭子 （石川県立金沢錦丘高等学校）

本実践研究は、高校英語授業における ALT と JTE の言語使用の補完関係が、生徒のスピーキング活動への関与、学習モチベーションの形成にどのように関係するかを明らかにしたものである。ALT は主に英語による授業を行い、JTE は必要に応じてやさしい英語や日本語で補足する役割を担う。この補完関係が効果的に働くことにより、生徒は安心感を得ながら英語を使う経験を積み、心理的なハードルを下げて自発的に発話するようになった。

自由研究発表 第 13 室（LC-25） 1 日目⑤ (17:00-17:30) SNSx

地域貢献としての英語観光ガイド—学習者のポジティブ体験の検証—

大澤 聡子 （岐阜市立女子短期大学）

学習者のネガティブ体験が学習の妨げになることはよく知られている一方、ポジティブ体験についても、学習効果が向上することが報告されている。本研究は、インバウンド需要を利用した英語観光ガイドをクイズ形式で実施し、参加者へのアンケート調査から、本活動が学習者のポジティブ体験を生む活動として有効かどうかを検証する。検証方法として、Shumann（1999）が示す、刺激に対する５つの評価を指標とする。

ワークインプログレス 第 14 室（LC-26） 1 日目① (14:40-15:10) SNSx

小学校外国語科における「読むこと」領域の全体像

佐藤 弘美 （札幌市立星置東小学校）

音声中心で音から文字への学習に円滑に接続する「読むこと」の指導に焦点をあて、今年度は小学 6 年生児童が「読めるようになる」ための言語活動やワークシート、指導法やその指導のタイミングなどを示した汎用性のある単元カリキュラムを開発する。そのため、まずは「読むこと」領域の全体像をつかむことから始めた。今後の単元カリキュラム開発につなげるための視点や今回の全体像自体の改善点等ご助言をいただきたい。

ワークインプログレス 第 14 室（LC-26） 1 日目② (15:15-15:45)

「書くこと」の指導における国語科・英語科の接点と連携の検討—意見文論証を一例として—

栗原 達也 （桐朋中学校・高等学校／東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科博士課程）

「書くこと」の指導には国語科・英語科それぞれに課題がある。両教科の指導内容における接点を活用して連携を図り、より効果的・効率的な指導を追求する意義は大きい。第二言語ライティング研究では母語・外国語でのライティング学習が両言語での文章産出に及ぼす影響が研究されているが、これらの知見を生かした国英連携指導の事例は少ない。本発表では、意見文における論証の指導を例に、国英連携のあり方を提案する。

ワークインプログレス 第 14 室（LC-26） 1 日目③ (15:50-16:20) SNSx

英語クラスにおける社会的比較は話すことの自己効力感と自己概念を規定するのか —発達的変化と準拠集団の英語力に着目して—

土橋 祐太 （広島大学大学院生）

本研究の目的は、①社会的比較によるネガティブな影響を受けている学習者の存在を把握し、②教育的介入により当該学習者の話すことの自己効力感・自己概念の向上を目指すことである。研究方法としては、技能別の英語自己効力感・自己概念尺度を作成し、一貫して質問紙調査を実施する予定である。本発表では、先行研究において検討されてこなかった発達的変化や準拠集団の英語力に着目した研究構想案について具体的に報告する。

ワークインプログレス 第 14 室（LC-26） 1 日目④ (16:25-16:55)

日本の英語学習者の英語音読に対する意識－英語専攻の大学生を対象とした研究－

服部 かれん （金城学院大学大学院生）

本研究では、人が読解活動を行う際に声に出して文章を読む行為を「音読」と定義し、英語専攻の大学生を対象に、英語を音読する際の意識について調査を行う。さらに、研究参加者の英語力と英語を音読する際の意識の持ち方の間に関連があるのかについて調査を行う。本調査によって、学習者が音読をする際や英語力の高い学習者が音読をする際の意識の持ち方が明らかになり、音読指導に関する有益な示唆が得られることが期待される。

ワークインプログレス 第 14 室（LC-26） 1 日目⑤ (17:00-17:30)

英語科におけるマルチモーダルリテラシーを育成する授業の提案と実践：Learning by design を用いて

石川 翔馬 （中京大学大学院生）

本研究は、the New London Group (1996)が提唱した Learning by design という教育アプローチを用いた実践報告を行い、①日本の英語科教育というコンテクストにおける Learning by design の成果・利点・課題を明らかにする、②英語科教育が目指す他者理解や社会文化的規範の深化という目的に対して、マルチモーダルテクストを用いることによる成果や課題を明らかにすることで、単元・授業レベルでの学習計画と実施レベルでの手法に関する示唆を得ることを目的としている。

発　表　要　旨

第２日目

６月２２日（日）

１．自由研究発表

９：３０～１１：１０

２．ポスターセッション

１１：１０～１２：２０

３．シンポジウム

１２：２０～１４：２０

自由研究発表　第２日

自由研究発表 第 1 室（Y-11） 2 日目① (9:30-10:00)

大学 EFL 授業における生成 AI と録画映像の活用：英語学習における情動面への影響

天野ジョーンズ 可奈子 （静岡大学）

スピーキング能力の向上を目的とした大学 EFL 授業において、生成 AI を活用した文法・語彙・表現の正確さの指導と、録画映像を用いた自己分析を実施し、それらが英語学習に対する情動面に与える影響を探究した。3 種類の質問紙を用いてコース前後のデータを分析した結果、学生の不安感および自己効力感のスコアに有意な差が認められ、これらの取り組みが学習者の情動面にポジティブな影響を与える可能性が示唆された。

自由研究発表 第 1 室（Y-11） 2 日目② (10:05-10:35)

教育移住は格差を超えるか、深めるか ——日中韓のトランスナショナル教育選択とグローバル文化資本の比較研究

山村 真由美 （名古屋芸術大学）

本研究は、中国人・韓国人の教育移住・移民家庭への調査を通じ、学歴競争の激しい社会における英語教育選択と文化資本の獲得戦略を分析する。日本人家庭との比較から、東アジア諸国に共通する再生産構造が確認され、教育移住が新たな競争戦略として機能しつつ、格差拡大のグローバル化に寄与している可能性が示唆された。

自由研究発表 第 1 室（Y-11） 2 日目③ (10:40-11:10)

日本の英語教育学における植民地主義：ローカル知の軽視が生む認識論的・倫理的問題

寺沢 拓敬 （関西学院大学）
亘理 陽一 （中京大学）

日本の英語教育研究の一部には，理論枠組みや先行研究の取り扱いにおいて，植民地主義的・西洋中心主義的な引用作法が見られる。本発表では，日本社会に関する知的蓄積や和文文献が十分に尊重されていない点を具体的に批判する。そのうえで，こうした研究作法が，認識論的・方法論的な問題（＝不正確で表層的な知識の再生産）に加え，倫理的問題（＝非西洋の知への敬意の欠如や知的権威主義）を引き起こしていることを論じる。

自由研究発表 第 2 室（Y-12） 2 日目① (9:30-10:00)

高校英語ライティングにおけるピア・フィードバックと自己改訂の比較—ChatGPT による評価を活用した学習効果の実験的検証—

湯浅 郁也 （名古屋市立大学大学院生）

本研究は、高校英語ライティングにおけるピア・フィードバックが学習者の思考力や表現力に与える影響を検討した。高校 3 年生 110 人がエッセイを執筆し、ピア・フィードバックを受けた改訂と自己改訂をそれぞれ行う活動を実施し、同一参加者内で比較した。ChatGPT による採点では、ピア・フィードバック後の得点が有意に高かった。発表では、得点変化に加え、コメント内容やアンケート結果から学習者の意識や学びの深まりについても触れる。

自由研究発表 第 2 室（Y-12） 2 日目② (10:05-10:35) SNSx

書くことへの抵抗感の変容要因に関する考察 —高校の「論理・表現Ⅰ」の実践を通して —

津久井 貴之 （群馬大学）
工藤 洋路 （東京外国語大学）

本研究では「論理・表現Ⅰ」の授業において、ICT ツール、教師フィードバック、ピアフィードバックなどを取り入れた学習を通して、書くことへの抵抗感が軽減された生徒に焦点を当て、その変容の要因を探った。質問紙調査、インタビュー調査、作文記録、振り返りの記述などを総合的に分析した結果、端末での学習への慣れや、他者からのコメントに対する受け止め方の変化などが、抵抗感の軽減に寄与した要因として示唆された。

自由研究発表 第 3 室（Y-13） 2 日目① (9:30-10:00)

小学校外国語科の話すこと［発表］のパフォーマンスの評価者信頼性の検討 —評価規準の詳細さと文字表示の影響に焦点をあてて—

酒井 英樹 （信州大学）

本発表は、小学校外国語科の「話すこと［発表］」のパフォーマンスに関する評価者信頼性に対する評価規準の詳細さと文字表示の影響を検討するものである。大学生に、通常評価規準と詳細評価規準に基づいて「知識・技能」と「思考・判断・表現」の点から評価してもらった。その結果、詳細評価規準の方が通常評価規準よりも信頼性を高めることと、文字表示は「知識・技能」の評価の信頼性を高めることが明らかとなった。

自由研究発表 第 3 室（Y-13） 2 日目② (10:05-10:35)

小学校外国語における「話すこと」「書くこと」の相互作用の検証 — セマンティック・マッピングの活用と活動順序の影響—

阿部 雅也 （上越教育大学 学校教員養成・研修高度化センター）

小学校外国語において、児童が安心して表現活動に取り組むための支援として、セマンティック・マッピング（SM）の活用効果と、「話すこと」「書くこと」の活動順序および相互作用を検証した。高学年児童 90 名を対象に授業を実施し、心理面とパフォーマンスへの影響を分析した結果、SM は安心感と構成支援に有効であり、「話すこと」先行は柔軟性を促す可能性が示され、現場での段階的支援設計に資する知見が得られた。

自由研究発表 第 4 室（LC-11） 2 日目① (9:30-10:00) SNSx

小学校教職課程の教科教育法で授業支援を取り入れる効果

階戸 陽太 （鹿児島国際大学）

本発表は，学生がコア・カリキュラムの中の外国語の指導法にあたる「英語教育の指導法」の中で，実際に小学校で授業支援を行った実践について報告すると共に，学生の振り返りを通して，その効果を考察することを目的とする。
実際に児童と触れ合うことで，外国語・外国語活動の現状の理解だけではなく，「英語教育の指導法」のよりよい理解につながることが示された。当日は，具体的な学生の振り返りを提示しながら説明を行う。

自由研究発表 第 4 室（LC-11） 2 日目② (10:05-10:35) SNSx

小学校教員養成における Small Talk 実践の充実を目指して

出口マクドナルド 友香理 （常葉大学）

本発表では、小学校教員養成課程における外国語（英語）に関わる授業において、英語を使用するモデルとして積極的に英語を使ってコミュニケーションを図ろうとする学生の意識改善を目指した授業実践を報告する。手立てとして、授業実践に必要な英語力のうち「話すこと」の土台になるであろう、教員役による Small Talk に着目し、段階的指導の工夫を取り入れた。その指導効果について、学生による意識調査の結果・分析を踏まえて考察する。

自由研究発表 第 4 室（LC-11） 2 日目③ (10:40-11:10) SNSx

教員養成課程で学ぶ学生の小学校での英語文字指導の捉え方

尾上 利美 （和歌山大学）

本研究は、小学校の外国語指導法の授業において、統合的フォニックスの学習や授業づくりを経験することが、学生の小学校での英語文字指導の捉え方にどのような変化をもたらすかを検討するものである。学生は文字指導で何に気をつける必要があると考えているか、どの文字の指導に特に気をつけたいと考えているか、４線上に児童の「お手本」となるように手書きした文字の分析結果を基に報告を行う。

自由研究発表 第 5 室（LC-12） 2 日目① (9:30-10:00) SNSx

EEBO・CLMET コーパスに基づく in/into 結果構文の意味分化の可視化 —状態変化動詞を対象としたベイズ推定と情報幾何学的分析—

藤原 隆史 （松本大学）

本研究は、英語の状態変化動詞に後続する in/into 前置詞句の用法変化を、2 つの歴史コーパス EEBO と CLMET を用いて分析した。各年代における in/into の出現頻度に対しベイズ推定を適用し、得られた確率分布から情報幾何学的距離を算出・可視化することで、構文の変遷を定量的に捉える分析を行なった。その結果、18 世紀後半から 19 世紀初頭にかけて、in と into の構文的・意味的分化が起こり、in が into に置き換わるプロセスが進行していたことが示唆された。

自由研究発表 第 5 室（LC-12） 2 日目② (10:05-10:35)

“in”か“on”か ーイメージスキーマでは選択が困難な 2 つの英語前置詞の使用ー

生田 裕二 （恵泉女学園大学）

多義性の強い前置詞用法をそのコアイメージを基に周辺的意味へと拡張して説明するアプローチはかなり定着した感があり、その意義も大きいと言える。しかし一方で、この指導では説明が難しい事例が少なくないこともまた事実である。本研究では特に使用頻度の高い前置詞 in と on に着目し、イメージスキーマの適用が日本語母語話者には困難な事例を紹介しながら、これらにどう対処すべきかをあらためて模索していく。

自由研究発表 第 5 室（LC-12） 2 日目③ (10:40-11:10)

目的語関係節の理解と産出：データに基づく考察

藤森 敦之 （静岡県立大学）
吉村 紀子 （静岡県立大学・国士舘大学）

本発表では、英語学習において主語関係節よりも難しいとされる目的語関係節について、「何が、なぜ、どのように難しいのか」を、私たちの実証研究の結果をもとに考察します。そして、学習上の問題点を克服するために、どのような指導を軸にすべきかについて具体的に提案します。特に、授業の言語活動において「知識から運用へ」を目指すアクティブラーニングの重要性を強調します。

自由研究発表 第 6 室（LC-13） 2 日目① (9:30-10:00)

極小規模校における、話すこと（やり取り）の指導についての教員の認識の変化 教員の振り返りを通した実践研究

山田 昌典 （葛尾村立葛尾中学校）

中学 3 年生での話すこと（やり取り）に焦点を当てた実践研究です。生徒数 5 名の中学校で、話すこと（やり取り）を通した考えの深まりを目指して指導しています。知識・技能は高まる一方、生徒とのやり取りが淡白に終わってしまうことに課題を感じていました。実践研究連続講座でのメンターや参加者の方々とのやり取り、自分自身の授業の振り返りを通して、自身の指導とその認識の変化を追いました。

自由研究発表 第 6 室（LC-13） 2 日目② (10:05-10:35)

高校英語授業におけるパフォーマンステストを含めた単元計画に対する生徒及び教師の認識について

田中 知聡 （山梨県立甲府昭和高等学校）

本発表では、パフォーマンステストを活用し、生徒が目的・場面・状況に応じて英語を使う力を段階的に育成する授業実践を報告する。教科書の内容や生徒の実態を踏まえ、定期試験までに育成したい力を見据えて単元計画を行い、英語の理解力と表現力を段階的に向上させる指導を行った。パフォーマンステスト及び授業に対する生徒及び教師の意識、教師間の協働の広がりについて考察し、学校の授業でこそ得られる学びの可能性を探る。

自由研究発表 第 6 室（LC-13） 2 日目③ (10:40-11:10) SNSx

リアルな英語使用場面を導入した探究型授業の実践 —海外同世代との協働を通じてー

清水 義彦 （富山県立大学）

英語は実技科目と考えると、パフォーマンス向上には自分の力を試す場面が必要と考える。日本の若者の国際競争力を高めることを目的としてオンライン学習を 2012 年に富山県内でスタートし現在は 21 世紀型スキル（ATC21s、2009）獲得を目指し県内の小中高校で毎年 50 回超の実践がある。今回は、授業で同年代の海外の若者とリアルタイムでペア活動を行い、作品を作り上げ発表した探究活動の実践とその教育効果を示す。

自由研究発表 第 7 室（LC-15） 2 日目① (9:30-10:00)

イタリア CLIL 海外研修プログラムの学生への効果—量的質的分析より

安達 理恵 （椙山女学園大学）

2023 年度からイタリア海外教育研修において、ＣLIL 授業を中心とするプログラムに参加した教職課程の学生に対する効果を報告する。研修内容は、学年末の 2 月にイタリアの小学校で日本文化を英語で紹介するプログラムと、美術館でのＣLIL ワークショップが主であった。プログラム参加前後に、選択式 20 問と記述 5 問のアンケート調査を行い、事後の効果とその要因はどのようなものであったかを検証する。

自由研究発表 第 7 室（LC-15） 2 日目② (10:05-10:35)

CLIL の 4 つの C（Content, Communication, Cognition, Culture）の統合度を示すフレームワークの作成〜CLIL に準拠して作成された教科書の分析を通して〜

菅谷 美玖 （千葉大学大学院生）

本研究は、Content and Language Integrated Learning (CLIL)に準拠して作成された教科書において、CLIL で重要視されている 4 つの C（Content, Communication, Cognition, Culture）がどのように統合されているのかという研究課題のもと行われた。主に大学向けに出版されている CLIL に準拠して作成された教科書 19 冊を対象に、Odate (2024)を参考に 4 つの C の観点から分析を行い、CLIL 教科書に見られる 4 つの C の統合度を示すフレームワークを作成した。このことから、より質の高い CLIL 教材等の作成へ示唆が得られた。

自由研究発表 第 7 室（LC-15） 2 日目③ (10:40-11:10)

小中連携における課題の把握と改善に向けた自治体としての取り組み 〜話すこと〔やり取り〕における思考力・判断力・表現力の指導内容について〜

矢野 司 （長野県総合教育センター）

本発表は、筆者が昨年度まで務めた安曇野市教育委員会で指導主事として小中連携における課題の把握と改善に向けた取り組みの実践事例を報告する。各中学校区の代表者から構成される「外国語教育連携委員会」の設置の経緯や取り組み内容、令和 6 年度の話すこと〔やり取り〕における思考力・判断力・表現力の指導内容を自治体でどのように情報発信・共有していったのかその経過や今後の課題を報告していきたい。

自由研究発表 第 8 室（LC-16） 2 日目① (9:30-10:00) SNSx

英語リメディアル授業におけるリアクションペーパーを用いた実践—学習者の英語使用に焦点を当ててー

杉山 友希 （西濃学園高等学校）

本実践は、大学の英語リメディアル授業において、例文を付与することでリアクションペーパーにおける学習者の英語使用を促す探索的実践である。記述内容を分析した結果、特に習熟度の低い学習者において、例文で使用されている語句をそのまま使用する初歩的な誤りが散見された。加えて、本実践の試みについて、多くの学習者が英作文能力の向上に「役に立つ」と感じていることが明らかになった。

自由研究発表 第 8 室（LC-16） 2 日目② (10:05-10:35)

教育実習前の学生に対する模擬授業の実施とリフレクションに関する調査報告

古家 貴雄 （山梨大学名誉教授）

昨年、筆者が担当した授業の実施状況と模擬授業実施後に行ったアンケート調査の結果を報告する。対象は、学部 2 年生の英語教育専攻の学生である。本授業は次年度に彼らが行う教育実習における授業の力量を付けることが目標であり、実際に模擬授業を行ってのリフレクションも課した。発表当日は、実施した授業の内容や状況、そしてまた、授業後に行ったアンケートの結果報告を行う。

自由研究発表 第 8 室（LC-16） 2 日目③ (10:40-11:10)

振り返りシート「できるよメーター」の有効性とその限界

宮田 学 （岸和田市立城北小学校）

外国語専科として、授業を終えた時点で、子どもたちが、どれぐらい学習内容を「できるよ」と感じているのかを知るために、自己評価する「できるよメーター」を取り入れた。研究課題を、児童の振り返りに、「できるよメーター」を取り入れることが有効かとする。データとしては、「できるよメーター」と指導者のリフレクションを中心とする。本発表では、「できるよメーター」の有効性とその限界について検討する。

自由研究発表 第 9 室（LC-21） 2 日目① (9:30-10:00) SNSx

中学 1 年生における Interactional Competence の概念を用いた「話すこと（やり取り）」指導 —CAN-DO リストの作成と実践—

会田 裕子 （国分寺市立第一中学校）

学習指導要領における「話すこと（やり取り）」の能力は Interactional Competence（以下 IC）(Galaczi & Taylor, 2018) と関連する (Kawamura & Takeuchi, 2023) 。本実践ではその概念をもとに学習者へのフィードバックを目的に作成された Nakatsuhara et al. (2018)の IC チェックリストカテゴリーを参考に、中学生の発達段階に合わせた 3 年間のやり取り CAN-DO を作成した。毎回の授業時に IC 項目を段階別に提示し、振り返りの指針とした結果、生徒の IC に対する意識およびタスクパフォーマンスに変容が見られた。

自由研究発表 第 9 室（LC-21） 2 日目② (10:05-10:35) SNSx

教室内での持続可能なコミュニケーション活動の実践

鷹野 英仁 （甲斐市立敷島中学校）

言語習得には多くの時間と労力が必要である。「継続は力なり」のことばの通りに、いかに優れた指導法・学習法であっても、１回限りや「三日坊主」では、それらの効果が発揮されることは不可能と思われる。よって、日本の一般的な中学生が置かれている普通の教室内の普段の授業内で、生徒、教師の双方にとって大きな負担感がなく継続できる持続可能な技能統合的コミュニケーション活動の実践を提案したい。

自由研究発表 第 9 室（LC-21） 2 日目③ (10:40-11:10) SNSx

学習者が反応したくなる自然な教室内相互交渉へ向けて 〜自然対話から見たテキスト英文の再構築〜

千田 誠二 （大妻女子大学）

テキストの対話文は、①文化的な相違など多様なトピックを扱い、一定の展開パターンから成立っていることが多いこと、②登場人物が肯定的で誇りを持った存在で描かれることが多い、などが言語人類学等の視点から分かる。本研究ではそこに自然な対話に伴う葛藤や迷いの欠落又は省略があることに着目する。談話研究等の視点を活かしながら、より豊かで本物らしい対話文再構築へのヒントを得る。

自由研究発表 第 10 室（LC-22） 2 日目① (9:30-10:00)

英語科教員にとって「困難な歴史」を扱うことは困難であるのか ―インタビュー調査を通して見えること―

能登 日向子 （中京大学大学院生）

本研究は、英語科教員 4 名へのインタビューを通じて、「困難な歴史」を扱う意義や課題を探った。教員は批判的思考や多文化理解を重視する一方、時間や学力差への配慮が課題とされ、立場には積極派と慎重派が見られた。

自由研究発表 第 10 室（LC-22） 2 日目② (10:05-10:35)

地方創生志向の英語教材としての「地域観光資源の多言語解説文データベース」の有効性の検証

南部 匡彦 （長野県立大学）

訪日外国人旅行者の滞在満足度向上を目的として、各自治体の観光資源の魅力的な解説文作成の支援事業が進んでいる。事業の成果物である「地域観光資源の多言語解説文データベース」は、地方創生そしてグローバル人材育成を目指す大学での英語教材として有効である。本発表では、データベースの各カテゴリ(文化財・自然・観光)の量的・質的な傾向について概観し、また各解説文における語彙・文法構造の出現特性について論じる。

自由研究発表 第 10 室（LC-22） 2 日目③ (10:40-11:10) SNSx

大学生英語学習者におけるアイロニー理解の研究

西川 明美 （愛知学院大学大学院生）
藤田 賢 （愛知学院大学）

グローバル社会でのコミュニケーションにおいては、リンガ・フランカとして英語を使う際に、語用論的能力を身につけることが重要であると指摘されている（鈴木, 2024）。本研究では、Ellis et al. (2024)におけるアイロニー理解テストを先行研究として、日本人大学生におけるアイロニー理解の特徴、アイロニー理解と英語習熟度の関係について予備調査を行った結果を報告する。

自由研究発表 第 11 室（LC-23） 2 日目① (9:30-10:00)

小学校英語教育における Online English Test の開発 —絵 MET Online 21 問と 30 問の開発・実施による結果分析—

清水 万里子 （岡崎女子大学）
牧 秀樹 （岐阜大学）

本発表は小学校英語教育における Online Listening Test の開発・実施の結果分析である。2022 年に開発した絵 MET (The Minimal English Test)紙版の Online 版 21 問を実施した結果分析と 9 問追加した 30 問の Online 版を実施した結果分析を提示する。MET は、その特性上、問題数増は避けたいが、信頼性係数を上げるためには、問題がどの程度必要であるか検証した。

自由研究発表 第 11 室（LC-23） 2 日目② (10:05-10:35) SNSx

高校英語の学び直し

後藤 隆昭 （九州看護福祉大学）

この研究の目的は、大学生が高校での英語学習を振り返り、どのような事を学び直したいと思うのかを明らかにし教育的示唆を得ることである。授業参加者 33 名に対し、自由記述式で回答を求めた。結果、30 名が学び直しは必要と答え、単語（23 件）、文法（18 件）、リスニング（9 件）、会話（8 件）、発音（7 件）の順に多かった。結論として、高校英語と大学英語を一続きとして捉え、学びを展開・継続していく姿勢が必要である。

自由研究発表 第 11 室（LC-23） 2 日目③ (10:40-11:10) SNSx

Teaching Paraphrasing Questions in Class, Drawing on Cognitive Linguistics

庄司 椋哉 （南山大学大学院生）

This research explores a better way of teaching “paraphrasing questions”, such as “Put the right words into parentheses to make sentence B equal to sentence A”.

To achieve this, the study focuses on three tasks:

(A) investigating differences between paired sentences in “paraphrasing questions”, with reference to Cognitive Linguistics;
(B) conducting questionnaires for high school students about “paraphrasing questions” and how they are taught; and
(C) examining the compatibility between Cognitive Linguistics and “paraphrasing questions” based on the findings.

自由研究発表 第 12 室（LC-24） 2 日目① (9:30-10:00)

高校生を対象とした TBLT と明示的文法指導の「交替型の展開」 ～学習者の認識と英語表現への影響をめぐって～

小宮 秀人 （東京科学大学附属科学技術高等学校）

本発表では、タスク・ベースの指導（TBLT）と明示的文法指導を交互に行う「交替型の展開」について、生徒の認識や英語表現への影響を検証する。生徒が使用した英文や振り返り記述、アンケート調査の結果、「交替型の展開」においてタスクは文法の授業での学習内容を試行してみる機会となり、一部の生徒にとっては文法指導との関連の中で効果的な学習サイクルを生み出す可能性があることが示唆された。

自由研究発表 第 12 室（LC-24） 2 日目② (10:05-10:35) SNSx

高校英語授業における生徒の意思決定型タスクの認識ーホワイトボード・ミーティング®企画会議に基づくディスカッションを事例としてー

田畑 健太 （北海道函館中部高等学校）

本発表の目的は、高校英語授業における意思決定型タスクの生徒の認識を理解することにあった。ファシリテーションの技法であるホワイドボード・ミーティング®企画会議に基づいてディスカッションの授業を実施した。分析対象は言語活動中の発話や事後アンケートであった。その結果、ディスカッション中に生徒が感じる困難や合意形成に貢献すると考えられる言語材料が確かめられ、授業改善への示唆を得ることができた。

自由研究発表 第 12 室（LC-24） 2 日目③ (10:40-11:10) SNSx

ラウンドシステムでつながる小中連携

小倉 崚太郎 （長野県佐久市立臼田中学校）
西村 秀之 （拓殖大学）
折橋 晃美 （佐久市立臼田中学校）
竹花 聡子 （佐久市立臼田小学校）

本実践では、小中学生を対象にラウンドシステムでの指導を行い、児童生徒の成長や授業の振り返りだけでなく、教師自身の振り返りや小中の交流から得た成果と課題を探る。中学校は 5 ラウンド、小学校では 3 ラウンドで授業を行っている。小中共に学期内でラウンドする方式をとっている。本発表では、児童生徒の取り組みや教師の振り返り等から見えてきた成果と課題を報告する。

自由研究発表 第 13 室（LC-25） 2 日目① (9:30-10:00)

明示的知識の定着と動機づけの関係 ー自己決定理論に関する質的研究－ ―自己決定理論に基づく質的研究－

藤原 剛 （山梨県立吉田高等学校）

年度途中から指導を引き継いだクラスの成績が 2 か月で大きく伸びた。生徒の文法への不安を解消する為に明示的指導を丁寧に行い、テストを反復したが、学習だけでは急激な伸びは説明できず、動機づけが関わっていると考えた。生徒の中で何が起こったのかを知るためにアンケートとインタビューを行ったところ、自己決定理論で言う「統合による調整」が起き、「有能さへの欲求」が満たされた生徒が多かったことが分かった。

自由研究発表 第 13 室（LC-25） 2 日目② (10:05-10:35) SNSx

学習意欲を高め、積極的な発信を促すリーディング授業の実践

米津 明彦 （日本福祉大学）

日本の学校における英語学習者には、学力テスト等に向けた単発的・受動的な学習傾向が見られることがある。しかし、継続的かつ自律的な取り組みを促し、話すこと（やり取り・発表）や書くことへの意欲を一層高める必要がある。この実現に向けた実践として、英文読解内容の報告と議論を中心とした大学生のリーディング授業について、学習成果物と自己評価およびアンケートの分析からその効果と課題を報告する。

自由研究発表 第 13 室（LC-25） 2 日目③ (10:40-11:10) SNSx

Suggestions for Improving Japanese Secondary School Students' Willingness to Communicate: Focusing on Confidence

Izumitani Tadashi （近畿大学附属高等学校・中学校）

Since the introduction of the current course of study, English education in Japan has emphasized communication. Secondary school teachers must now consider not only language skills but also students' motivation to communicate. This presentation explores the concept of willingness to communicate (WTC), reviews key research, and discusses how focusing on self-confidence can enhance students' WTC. A practical teaching approach will also be suggested to help improve students' communicative attitudes in English.

ワークインプログレス 第 14 室（LC-26） 2 日目① (9:30-10:00)

生成 AI を活用した Interactional Competence 育成 — 小学校教員志望学生向けのプロンプト設計とパイロット実践 —

佐古 孝義 （明星大学）
桐生 直幸 （鎌倉女子大学）

本研究は、小学校教員志望の大学生が生成 AI を児童役として用いて対話することで、児童と即興で伝え合うための英語力を高める試みである。ルーブリックとして AI に教室内英語力評価尺度を読み込ませ、対話ログを自動評価する仕組みを開発することを目的とする。本発表ではプロンプト設計と評価手法の作成の過程および初期データを報告し、今後の改良点を討議したい。

ワークインプログレス 第 14 室（LC-26） 2 日目② (10:05-10:35) SNSx

TBLT における中学生の試行錯誤の探究

折橋 晃美 （長野県佐久市立臼田中学校）

本実践では、中学生を対象にタスクベースの言語指導を行い、生徒の試行錯誤の方向性とその成果を探る。「無人島でより良い共同体をつくるために合意形成をする」タスクを行う。実践者は、タスクにより生徒が試行錯誤する場面を増やしたいと考えている。本発表では、タスクに取り組む生徒の発話から、生徒のタスクへの積極的な取り組みや試行錯誤を捉える分析方法について議論したい。

ポスターセッション

ポスターセッション Y 号館１階ロビー ポスター（11:10-12:10） SNSx

短期集中英語イマージョンプログラムの効果

笠井 千勢 （岐阜大学）
阿久 津元 （鶯谷中学高等学校）
松原 あずさ （鶯谷中学高等学校）
神原 利宗 （広島大学）

本研究は、日本国内で開催される 5 日間の英語イマージョンプログラムがもたらす教育効果を検証することを目的とする。私立高校に通う高校生を対象に英語運用能力、動機づけ、認知変化に焦点を当てプログラム参加の前後を比較検証した。またプログラムを受講しない生徒との比較を行うことで、国内で開催される短期間のイマージョンプログラムがどのような教育効果をもたらすのか報告する。

ポスターセッション Y 号館１階ロビー ポスター（11:10-12:10）

横浜市鶴見区の事例検討に基づく仲介活動を通した複言語・複文化的支援の可能性

松村 香奈 （鶴見大学）
守屋 亮 （静岡大学）

本研究は、CEFR 補遺版（2020）で示されている仲介活動の観点から、複言語・複文化的背景を有する「外国につながる子ども・若者」への学習支援方法を検討することを目的とする。外国につながる児童・生徒の割合が極めて高い横浜市鶴見区における当事者の現状を踏まえ、特に学習支援に携わる地域の支援ボランティアへの聞き取りや実践事例の分析を通じて、多様な言語文化資源を活かした支援の在り方を探る。

ポスターセッション Y 号館１階ロビー ポスター（11:10-12:10） SNSx

The Use of CMCs in the TBL Approach: A Focus on Written Complexity and Accuracy

城山 友孝 （愛知大学)

This study explores how synchronous and asynchronous computer-mediated communication support task-based language teaching to improve EFL learners' written accuracy and complexity. Involving 28 Japanese university students working with native speakers via Zoom and Teams, the research finds that synchronous interaction enhances fluency, while grammatical accuracy shows little change. These results show that using both types of communication fosters a more comprehensive development of language skills.

シンポジウム　A-2-12 (A-2 号館 2 階)（12:20-14:20）

質的研究が切り拓く英語教育研究の新たな可能性」

司会者：田中 武夫 （山梨大学）・浦野 研（北海学園大学）
提案者：髙木 亜希子 （青山学院大学）兼コーディネータ
吉田 達弘 （兵庫教育大学）
太田 洋 （東京家政大学）

全体要旨

本シンポジウムでは、英語教育における質的研究の意義と可能性について、多角的な視点から考察を深めます。日本の英語教育研究においては、質的研究の価値や方法論が十分に共有されているとは言い難く、教育の営みをどのように言語化し、学術的に捉えていくかが問われています。第一の発表では、質的研究の哲学的背景やパラダイムの違いに触れつつ、教室・学校・社会といった複層的な文脈を踏まえて、英語教育学におけるその意義と課題を捉え直します。第二の発表では、社会文化理論に基づき、「出来事」や「文脈」を丁寧に読み解く姿勢と、その過程における困難さについて論じます。第三の発表では、授業づくりを支援する立場から、質的研究の有効性と、教師の省察を促す研究プロセスを紹介します。具体的な事例を交えながら、教育の営みを数値化ではなく言語化することの意味、そして質的研究の役割について、研究者と実践者の双方の視点から共有する場としたいと考えています。本シンポジウムが、英語教育研究における質的研究アプローチへの理解を深め、研究と実践を往還しながら、理論的・方法論的展望を共に考える契機となることを期待しています。

英語教育研究における質的研究の役割と新たな展開
髙木亜希子（青山学院大学）

本発表では、日本の英語教育実践の多様性や豊かさを捉えるために、質的研究が果たす役割と可能性について考察します。質的研究は、研究参加者の行動や語りなどに焦点を当て、人々が経験にどのような意味を見出しているのかを、文脈の中で理解しようとする研究アプローチです。教育現場に根ざした英語教育実践において、現象の多面性や研究対象の変容を描き出すには、学習者や教師を取り巻く教室・学校・社会といった複層的な文脈を考慮し、量的研究のみならず質的研究の視点が不可欠です。本発表では、研究の哲学的背景やパラダイムの違いに触れながら、英語教育学（応用言語学）における質的研究の広がりと、その学術的意義を概観します。あわせて、中学校英語教師が生徒の自律学習をいかに支援したかに関する研究事例（Takagi et al., 2023）を紹介し、そこから導かれる教育的示唆と事例の価値について述べます。最後に、伝統的な質的研究の方法論の枠組みを超えて、「監査文化」に抗しながら質的研究を「学びほぐす」というアンラーニングの考え方（楠見, 2024）を取り上げ、新たな質的研究の展開についても考えます。英語教育に携わる多様な立場の方々と考えを深める機会となれば幸いです。

出来事や文脈を「ごっそり」とらえる質的研究―社会文化理論の視座から―
吉田達弘（兵庫教育大学）

ビースタ（2024）は、「研究を進めるにあたって最初に判断すべきことは、どの道具を使うのかではなく、取り組むべき問題は何かということであり、その問題に取り組むためにどのような道具が役に立つかを問うこと」（p.11）と述べています。そこで、本発表では、私自身が、取り組んでいる問題が何かを述べ、それを考える上で、質的研究がどのような役割を担っているのかを考えたいと思います。私は、社会文化理論という視座から英語学習や英語教師の成長を研究していますが、一連の研究では、対象となる人々の変化を因果関係的に捉えるのではなく、「現場で複雑な相互作用によって生起する『出来事』や『文脈』」（やまだ，2007）を「ごっそり」とらえ、相互行為を通した人々の発達が、どのような社会文化的道具や他者に媒介されているのかを理解しようとしてきました。一方で、リッチなデータを読み解くためには、メソッド磨き（と時間の確保）が必要なこと、また、自分自身の立ち位置や見方に対して、常に批判的であること（省察性）が求められ、ここに質的研究のしんどさがあると考えています。以上の経験などを踏まえ、質的研究が切り拓く新たな可能性をみなさんと考えたいと思います。

授業づくりをサポートする立場で感じた質的研究の意義
太田 洋（東京家政大学）

授業づくりをサポートする立場で感じた質的研究の意義を述べたいと思います。授業研究は英語教育の現場において重要な実践とされていますが、しばしば研究授業と研究協議のみで完結し、一過性に終わってしまう傾向があります。授業をより様々な視点で捉える取り組みが求められます。そこで、質的研究の手法を取り入れ、研究授業後に授業者へのインタビューを実施し、テーマ分析を行いました。焦点は、研究授業が教師の認識にどのような影響を与えたか、特に授業後に生じた「気づき」や「揺さぶり」にありました。教師の発話からは授業の背後にある意図や葛藤が浮かび上がり、授業者をより理解するために有用な情報が得られました。また他の教師にとっても共感や発見があり、教師を支援する立場にある者にとっても有益な知見が得られました。質的に分析する過程では、インタビューデータを読み込み、キーワードを抜き、テーマを設定し、関係を考えました。「この解釈でいいのか」という思い、共同研究者とミーティングを重ね、お互いの分析、解釈を話し合うという過程を経て研究を進めました。時間がかかりましたが、その過程を通してこそ見えてくるものがあることを実感しました。